

松島さんとコウノトリ～絶滅と復活の物語～

山下美登理・西川美栄・桐島杏莉（豊岡市立コウノトリ文化館）

はじめに

コウノトリはコウノトリ目コウノトリ科の大型の鳥で、体長1.1m、両翼を広げた時の大きさは2mにもなります。水田や湿地、河川などを好みますが、日本の野生コウノトリは乱獲や農薬などにより1971年に絶滅しました。その後繁殖事業が進められ、34年後にあたる2005年9月24日、コウノトリは再び日本の空に飛び立ちました。

長年にわたってコウノトリの保護増殖に関わってきた松島興治郎さんは、その日、こうコメントしました。

「第1歩ですから大事にしてほしいです。」

コウノトリの人工飼育が始まってから60年、放鳥から20年を迎えた2025年の春、松島さんから当時のコウノトリ野生復帰までの貴重なお話を伺うことができました。そこには、厳しい環境下におかれたコウノトリの運命と深く結びついていた松島さんの姿がありました。

どんな時もコウノトリに備わっている力を信じ続けた、そんな松島さんの半生を紙芝居にまとめました。日本の野外コウノトリの個体数が500羽を超えた今だからこそ、放鳥に至るまでの苦労をみなさんに知っていただければと思います。

企画展の実施

紙芝居の完成に合わせて、2025年9月17日から10月30日まで企画展を実施しました。紙芝居のパネルだけでなく、保護増殖に取り組んでいた当時、飼育場で松島さんが使用したちゃぶ台や、野生コウノトリの捕獲に使用した機材などを展示し、放鳥までの苦労をより身近に感じていただけるような展示構成にしました。



写真1. 企画展の様子



写真2. 紙芝居のパネル

トークセッションでの上演

コウノトリ放鳥20周年記念トークセッション「コウノトリ野生復帰の『原点と未来』～私たちは何を目指してきたのか～」を10月19日にコウノトリ文化館で開催し、制作した紙芝居を上演しました。この上演を通して、かつてコウノトリ野生復帰に関わってきた人たちにとっては原点を振り返る機会となり、これから関わる世代にとってはその原点を知る契機になりました。

共生のひろばでの披露

今回開催された第21回 共生のひろばでは、紙芝居のパネルを展示するとともに、上演も行いました。日本の野生コウノトリの個体数は500羽を超え、豊岡では日々の暮らしのなかで当たり前に見える鳥になってきました。また、日本各地でもコウノトリが見られるようになってきており、この共生のひろばでも、「最近コウノトリを見た」という声が多く聞かれました。こうしたことから、コウノトリが再び身近な存在となっていることがうかがえます。

一方で、野生復帰に至るまでの歩みや地域の取り組みについては、必ずしも十分に知られているとはいえません。コウノトリと共に歩んできた豊岡から他地域へ赴き上演することで、野生復帰の最前線にあった苦労や、一度失われた生き物を回復させることの難しさについて、知っていただく機会を創出することができたと考えます。



写真3. 共生のひろばの様子